

7
2
552

官許無水岡田開闢法

明治元年戊辰十月全

林7-552

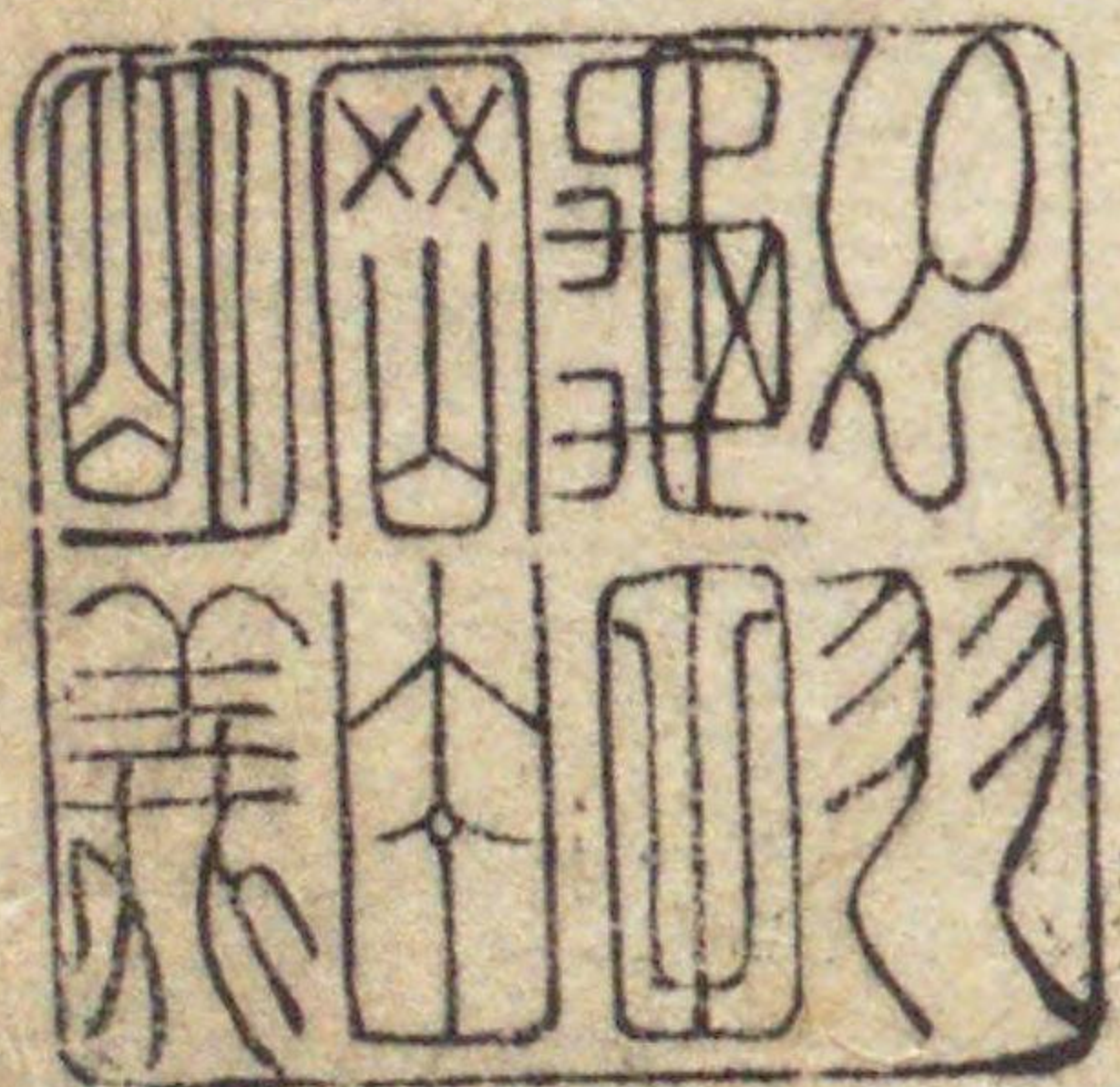


明治元年戊辰十一月

官許

魚水岡田開闢法

育民堂造





明義
岩野目
沢村長
岡田典
右二門
義智
長子

無水岡田開闢法序

世乃學士ガクシと仁ニと云イハもの論ロンど是コトと見ミる心ココロと專マカらうとて
理リの聞クえつツまじも世ヨの益セキもあく一の惠メと施セいたる
云事コトとも聞クる富フ者シヤの千金センギンと重オモくする即ツちす家居ケと飾カり
衣食イシキとの美ビし親戚シンセキと顧カるりの稀まれ之貧マシきもの日ヒに
乏マしく或ある所ところと去サる巧たくま食シと博ひろ奕あ盗と人ひととあり果は道路だうろ
に斃なるふ至いたる有あり如此このごとく仁にと云いふ如何いかあるものや予われ未いま
是こと見みる藩はんの岡田邦太郎明義あきよしと云いふ者もの先祖せんぞの加賀かがの松永まつながの司つかさど
く岡田義久よしひさと云いふ後のちは松永氏まつながしと名なのつらり夫そが慶長けいちょうより大

信
言

無水岡田開闢法

有又



坂の乱と避く此地より来り世々村長とありて數々の田畑と持
傳へ豪家より明義切より農業の艱難と嘗め貧民の頼む
方ある者も哀れ荒地を開き或は炭と制し漆と植甚貧者
へ子と産て三兎の外に棄てると義倉と企是と育る法と設け
其他のろくく賑恤の方と施しんんん猶力の及び難く有るは
四方より開闢等の術と求るも不図も渡伽陀羅薯の製法
と得しりける漢名の馬鈴薯と云氣味甘平無毒是と植て試
る不繁殖數十倍に至る其上ある如く食とあり寒菓持餅とあり
次ある味噌と水酒とる也と云大に民食の益ありて救

荒の第一其善良米ともありて岡田糙とて名はけ
り因り江都に登り
據方ありて道路に斃るるに至る者と招き集め廬舎調度と興え
荒地を開きあると願る其費用數千金人數千人家若干軒明義
空手して行くとツも
謂ふ一其事の手にて成就せざれば此頃米の價貴く貧民の益困
窮に至るを嘆き先此書と櫻木に上せし弘く世に施し九日本國
中路頭を臥す者ありとせんし世に棄てる人と招き集め荒地と
開き林木の根と土と焼き野の草と腐らしめ或は棄てる塵

芥と糞とあり恒の産業は就けく公役と勤め父母妻子と養ひ
 無異は身と終らしめん乎是と三棄二興と云を於て知人あは
 是の序と請ふ其言を聞く世の所謂山師の志も此の也と
 試み驗あは山師も非と予常と思ふ仁人の山師の中なる者
 成んと扱ひ此人こそ仁人との者あり始て仁と云ものを見
 を悦び其請を否まば拙き筆は其大畧と書はまづりぬ
 文久紀元辛酉季夏

羽州龜田藩

鶉沼國懋誌



無水岡田開闢法

羽州由利郡

岡田明義著

馬鈴薯種圃置方

一 秋九月末掘上を晴天に三日乾し土地を二尺後掘方
 一 窪の葉もも糝もも安んず中を圃壺あり蓋をよくりして
 水のまゝぬやうにすりをり但し來春と知くそは修ふ極
 壺ハ高々一

種子之圖



種子之圖
 馬鈴薯種圃置方
 種子之圖

作方

一 作り方の別は子細が、（さし） 煙草と作る如くなり春二月も

半夏（五月の） 土月の土より、（さし） 糞の糞赤と穀何れも土より

一 種は大小の四ツも六ツも切く切口へ木灰を付く樽を

皮付多き様切く切く小サき丸を糞赤一樽を五

時小サきを多々罎（かま） 壺（か） 壺（か） 壺（か）

堀とケ

一 秋八月十日月上旬までより翌春と煙と壺もと

製方色く

一 生糙利國製と云烟の山葵卸し箱の付さるもの也

是を卸し布袋に掛ケ水とのぼく透せし忽ち水

清むと水取器次第極装とある是と罎田白糖と云

食料菓子へ本より葛粉蕨粉の代り比米粉の類と

作り方

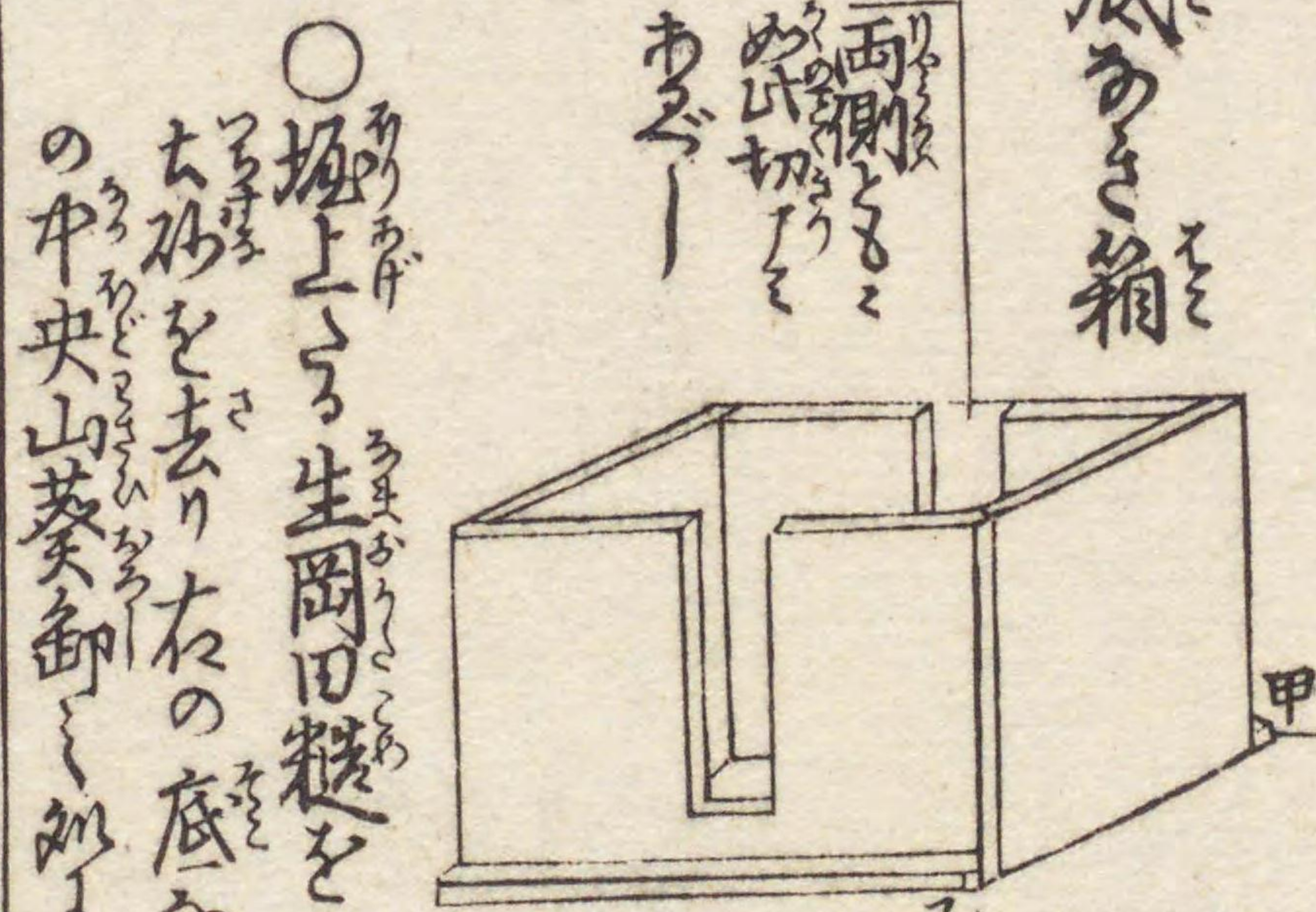
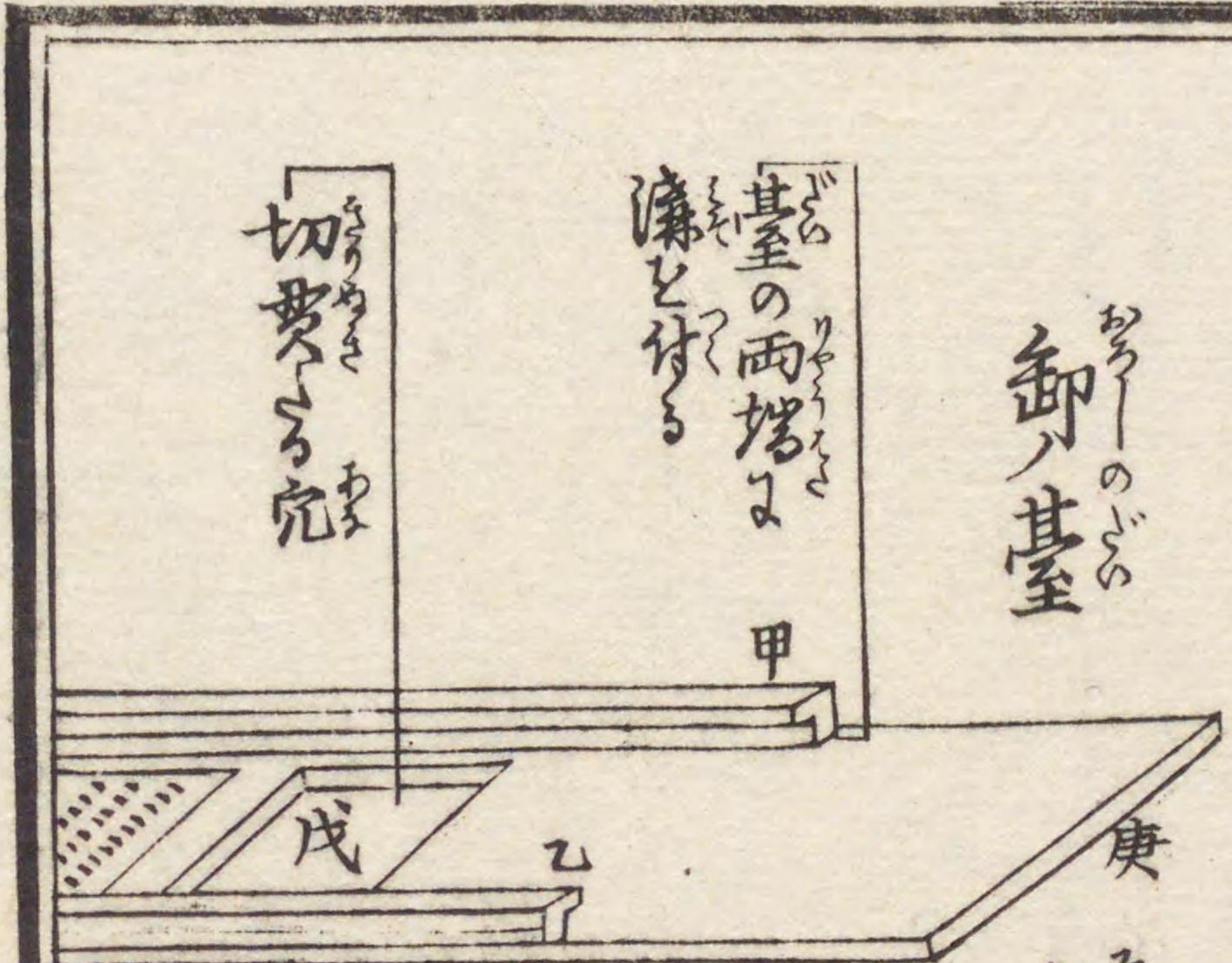
右の製粉と晴天に乾上テ石臼にて搗らるる掛て

是と是と罎田白糖と云此白糖又上下ありそ

糧持飯酒味増醬油等とあり也

製方罎

利國製器械之圖



○堀上らる生岡田糖を水にてあらし
去砂を去り右の底あり箱を
の中央山葵卸しぬる各々洗

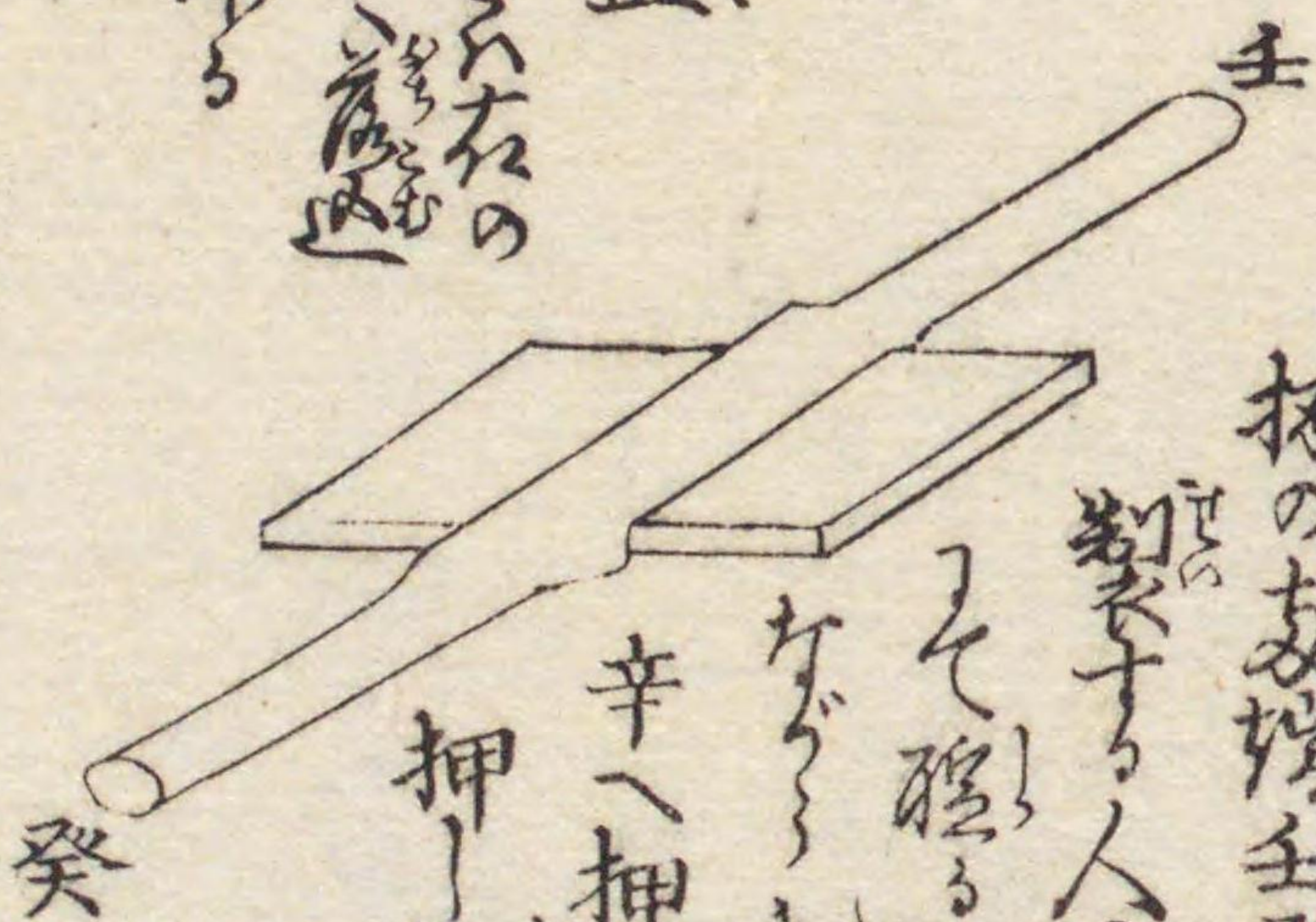
け箱の両側の
下の方ぬれ
爪と付く
の両端とわ
海の甲乙の
より合して
丙丁の如く
通ふ換製
とべ

洞の山葵卸し

け箱の下に大さ
る箱と各々
卸しする糖の底
あり箱の中より
戊己の穴と接して
箱の中より



ひら糖と砂糖中へかき目よ入れ扱
丸い果糖を蓋をいし蓋よけする
柄の支端に突の如く
製する人の支
て糖を押し
なぐ糖の庚
辛へ押し
押し突と
次の方と見合をへ



生固田糖と
利必装の器
械して卸を圖

右の卸して上る桶へも
おをいれ撥を動かす
布袋へ汲み漏して上る
他一豆腐と湯をいりしる



ついでに
如图漏して桶の底に
沈んで水の澄を待つ
上を流してすらすら
三四度繰り返して水を
去り乾いたるを
固田白糖と云
又布袋に残りしるを
その日こそ乾いて
粉とすして固田白糖と云



糖を
乾かす
器

酒造の方

一 玄糴 壹斗 蒸之

配 壹升

水 壹斗 余り入

已上桶と造り四七日うへて酒と成ぬ之掛是清酒

と有り焼酎ともあり也

味噌の方

一 玄糴 壹斗 蒸之

大豆 三升 蒸之

糴 又升

糯米 四升 蒸之

塩 又升

糴 七升

已上搗合を桶に入垂く日あがずし味噌と成

溜醬油の方

一 生糴 壹斗 蒸之

糴 壹斗

已上四味搗合を大豆の黄水込山入桶と仕必有り

餅の方

一 餅米 壹斗 蒸之 玄糴 壹斗 蒸之

已上搗合を餅と成其外用方試て知るべき也

白玄糴とも穀年終る迄と換むる事なり其糴

の備へ或ハ外國交易の良果とも成るべし

銭歌

園田糖切能合料沼造味等
香油餅菓子又穀日糖

馬鈴薯之圖 遮伽陀羅薯とも云

薯之赤白の二種あり赤ハ實の穀

多く生ずれば小サ死也一利薄し

白ハ實を生ずる事少かるれば大

有故畑揚の存するに於ては切き大

利ありは依るが次白と赤は心裁に

を合用製造してハ赤白皆よく



赤薯ハ莖葉を
赤くはんと帯り

折々真と摘止へ

莖と切て挿さる中一の

葉より根を生じ根より

薯を生じたる図

中土



春より冬まで生ずる莖を挿え

けの子印し物と切て薯菜と

ナリ一是又一ツの利益なり

○早春畑はたけの苗なわ代しろと極きよく養やしやうと多く仕しけつ極きよくと下したり芽めの出い
 て六七寸しちしゆん迄いたる時ときを抽ひき別わかく極きよくを如ごとく時ときを作りつくり二三寸さんしゆん
 間あひだと並なら一本いっぴん並ならへ極きよくと此こゝの暮くれり大おほく成長せいじやうも早くして種たね
 の不足ふそくを補おぎなへ種たねをツつより芽めの何なん本ほんも生なずる故ゆゑを倍たがひ
 無むの莖くきと葉えの繁さかみしと暮くれり生なずるより少すくく小こサさ芽め
 芽めを抽ひきこれと苗なわとより一いち隻しやく兩りやう値ぢの方かたなり如ごとくして正月しんげつ
 生なずる苗なわの二月にげつ極きよく二月にげつの苗なわの二月にげつ極きよくと月つき々ごとく次つぎ芽め極きよく
 正月しんげつ極きよくするが六月ろくげつ下旬げんぱんか七月しちげつの半なかと極きよく極きよく極きよく
 する畑はたけの六月ろくげつ生なずる苗なわを抽ひき時ときの暖あたたまり雪ゆきをまき
 一いちヶ年ねんと二に五ごの五ご実みと得える利り益えき殊こと多おほし

氣味甘平無毒主治補虛之益氣力健脾胃強腎陰
 切同薯蕷

海中ノ人多ク壽ナルハ五穀ヲ食セシテ甘藷
 ヲ食スルガ故ナリ

右本草ニ見ヘタリ

然しかるも今いま殺ころ製せい造ぞうし正ただまに於おかすをや疾病しやびつ家かを素もと
 より虚弱よへく人ひとを白しろ糖とうと白しろ砂さ糖とうと和あし白しろ湯とうとを煉ねり
 平生服用へいぜいふくやくして補おぎなむ功こうの如ごとく人事じんじを如ごとく

岡田開闢積

一岡田を反分

又人

又人

又人

又人

是上中下下平均

上岡田部十部人半

同 十部人半 四部人半 十部人半 編出

耕作取上と一式子間積

疇か

種部

一番作

二番作

但志人并

堀中

中岡田十八人 糞取上

日 九人 俵編

下岡田十三人半 糞取上

日 七人 俵編

下岡田九人 糞取上

日 四人半 俵編

外二十人平均肥子面積

上岡田子間合 六十四人

中岡田日 又十七人

下園田口

又十人半

下園田口

四十三人半

一上園田吉及分 取上分

以生糞四十二石

他一坪以三疇一疇以十鞍うすうすあひ抽間六寸至一鞍上分

又合上分一坪以吉斗五升上分以糞糞又合

吉斗六十鞍成吉及分 存吉石又斗以

一中園田吉及分 取上分

以生糞三十六石他一鞍四合一坪吉斗五升上分

一下園田吉及分 取上分

以生糞五十七石他一鞍三合一坪九升上分

一上園田吉及分 取上分

以生糞十八石 他一鞍四合一坪六升上分

一上園田吉及分 生糞四十二石取上分

以白糞九石 生糞吉斗五升分三合出分

外分

吉糞十三石又斗生糞吉斗五升分三合出分

計口部十部石五斗

計慶子間六十四人

日 九十人

合百又十四人

一人身

喜斗四升六合を又ツル

一喜斗年三百六十日

内 六十日 休日引

残 三百日

計取上白玄糙四十三石八斗三升

夫らうきくとりあひまをうり
前耕作取上と掛

白玄製造掛一人身生糙五斗ツ

一 中岡田喜及分生糙三十六石上ケ

計白糙七石部斗 前日断

外

玄糙十石八斗 前日断

又十八石

計慶子間又十七人 前日断

日 七十部人 白玄製造掛

合 百部十九人

一人身 喜斗三升九合又ツル

前日 三百日取上白玄糖四十一石八斗五升

一 下岡田吉及分取上斗 砂十七石

斗白糖八石四斗 前日断

外

白糖八石一斗 前日断

斗十三石五斗

斗慶子間又十人半 前日断

合 百四人半

一人付 斗升九合一斗八才以是

前日

一 三百日取上白玄糖三十八石七斗又升四合

一 下岡田吉及分取上十八石

斗白糖三石六斗 前日断

外

玄糖八石四斗 前日断

斗九石

斗慶子間又三人半 前日断

斗 三十六人 白玄製造掛

合 七十九人半

一人存 去年斗三升三合

前日 三百日取上白玄糙二十三石九斗六升

一 夫婦去年日救七百八日 三百又十四日

内百二十日 休日引一人付六十日

日百四十日 女半分せんぶん引

是引このり残る 四百四十一日 主人前直

一 上岡田 白糙六十四石又斗二升一合 斗五分

一 中岡田 六十一石又斗一升九合 三及分

一 下岡田 又十六石九斗三升 四及分

一 下岡田 早九石九斗二升一合 又及分

一 上岡田 又及分

白玄糙 斗十斗石又斗

内三石又斗上畑斗毛取雜石上引

残る 十九石益

一 中岡田 又及分

白玄糙 十八石

内三石 中畑上右引

残る 十又石益

一下岡田幸及分

白玄糙十三石又半

内卦石又半下畑上右日断

残石 十石益

一下岡田幸及分

白玄糙九石

内卦石 下畑上右日断

残石 七石益

一^{たて}^の農家千軒^の幸^の軒^の下岡田幸及分^の耕作^のす^の所^の

一^け白玄糙九千石

内卦石 糙石上^り日 残石 七千石益

一^{たて}農家^の別^の又^の千人 幸^の人^の存^の飯料^の送^のと^の卦石^の

け米穀^の幸^の万石 内七^の石^の 幸^の又^の分^の十^の石^の 下^の畑^の上^の右^の日^の断^の

右^の別^の合^の之^の少^のハ^の又^のヶ^の年^の一^のヶ^の三^のヶ^の年^のの^の貯^の出^の来^の

一^{たて}農家^の子^の軒^の幸^の新^の存^の下^の岡田^の幸^の及^の分^の耕作^のす^の所^の

一^け生糙^の幸^の万^の半^の石 幸^の及^の分^の存^の十八^の石^の上

内 千^の又^の百^の石 種^の分^の別^の幸^の及^の分^の存^の幸^の名^の又^の半^の

残^の石 幸^の万^の六^の子^の又^の百^の石

一 白糖三千三百石

白糖を升より都合出

一 金八百部五五百石

尚時を升代金を分下核

一 金糙四千九百六十石

日 金を升より三合出

一 金二万九百三拾七石五斗

尚時を升代金を分下核

二 口合 金拾五万二千四百二十七石五分

此を軒舟金百拾二石五分三厘を以て益

返り大に相定^{ひり}テいりてあり米^{こもの}價と日換^{ひか}を考い

一 開業十二方志

一 金談調度の法

一 新家取建の法

一 人民引移の法

一 年貢取立の法

右の如く條の仕法は別々に二葉二興毎水岡田戸籍の形
つり便宜の法ありて文甚長之れハ爰に略す

岡田生家世業農自幼好種藝竊慕
李悝自圭之為人講盡地力之方周流
四方財產殆蕩備嘗艱阻余其苦心賦
一絕以祝前途

欲為蒼生救渴饑濟危利國一男兒
安知今日肉流苦即是化時功業基

文久辛酉季夏

梅軒散人



岡田翁少抱周貧之志七遊諸國備嘗艱苦以求周貧
之方以為其播墻不擇土之肥磽時之寒暄而尤易蕃
殖且用力少而得益多者莫如馬鈴薯而以世人所製
用有未盡其法乃筆之書或其所到戶說人諭隣里賴
之得存活者甚衆而翁家資為之殆蕩盡亦以不為意
也曾到野州奈須野招集流離行乞之民為結茅舍與
之衣食耕具教以種薯之法僅期月間舉煙者幾二十
餘戶然以新墾荒莫之野非一人之力所能及欲至京
師乞

官且因以遍施其法四海今茲明治改元

春伏

關上書

朝廷嘉納之擢為京府庶務下調且使上書于梓以弘其法翁大喜請予題一言於卷首予受而閱之以謂推此法及窮鄉遐陬也棄地日辟流民復業家給人樂則頑凶無賴之民亦可以變為良民也翁之功不亦偉哉今夫凶年飢歲貧人有衣不蔽體屋不蔽風雨霜雪之夜寒氣砭骨終宵不能睡者甚至有割父子之愛絕夫婦之歡流離顛沛終日乞食不得半椀羹終餓死道路者而富人則安居大厦高宇之中夏暑冬裘曾不知寒

暑之苦耕耨之勞歌舞醉飽夜以繼日嗚呼使如是者觀翁所為莫可以滿面慚汗知向義遷善也予與翁相識未越一月感其志之勤也於是乎言。

明治紀元抄冬

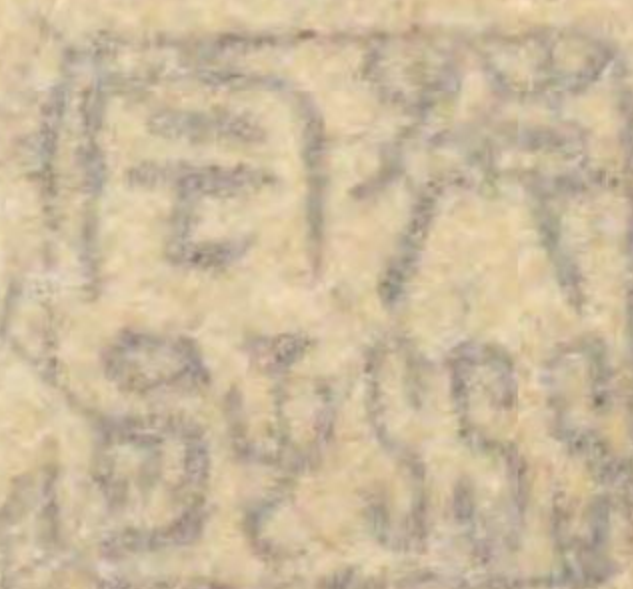
南豐黃築藩今村英川撰



特 7
2
552

服於天下林公

南豐黃真乃今林英似矣



猶未進一月... 此後... 矣

